

筑波 しらぎく

医学教育における 肉眼解剖実習について

筑波大学医学医療系 教授

高橋 智

白菊会会員の中にもご存知の方がいらっしゃると思いますが、筑波大学の前身は東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学で、教育者の育成と共に新たな教育法の開発は大学の伝統であり、常に最先端の教育改革を行なって来ました。医学教育についても同様で、筑波大学医学群医学類では、開設当初より現在でも行われている統合型カリキュラムや長期の臨床実習を国内で初めて導入するなど、最新の医学教育を実施して来ました。平成十六年度には、それまでの受動的な学習か

ら参加型教育、発見的・選択的学習への改革をいち早く導入し、教員が教壇から一方的に知識を教える受動的な教育を極力少なくして、少人数の学生が自ら与えられた課題を解決していく、「問題解決型」の自己学習を中心とした教育方法への転換を行いました。この能動的な学習方法の導入とともに、技能・態度も重視する教育に転換しました。また、日本医学教育評価機構(JACME)による「国際基準に基づく医学教育分野別認証」を取得し、国際基準に適合した教育カリキュラムを実施しています。このような医学教育改革は医学類だけではなく、看護学類や医療科学類でも継続的に行われており、新たなカリキュラムが導入されています。

このように筑波大学医学群では、常

発行 筑波大学
白菊会事務局
茨城県つくば市
天王台1-1-1
電話 029(853)3230
印刷 前田印刷株式会社
電話 029(875)6696



令和六年度慰霊式 (祭壇)

字 略 紙 筆 題 者 筆 略 歴

今井 凌雪(いまいりょうせつ)
本名：今井 潤一(いまいじゅんいち)
大正十一年十二月十九日(平成十一年七月二十六日)
立命館大学卒・筑波大学名誉教授
日展参事・書法研究雪心会会長・
社団法人「日本書芸院」名誉顧問
朝日新聞社主催「現代書道二十人展」メンバー
日展文部大臣賞、日本芸術院恩賜賞受賞、
勲三等瑞宝章受賞

により良い医学教育を目指していますが、何時の時代でも完全な教育法というものは存在せず、今後も様々な改革をしていく必要があると思います。しかしながら、様々な教育改革の中にあっても、肉眼解剖実習の重要性は変わらないと思います。なぜなら、肉眼解剖実習を通して学生が得るものは、解剖学的な知識のみならず、ご献体して



令和六年度慰霊式(学長式辞)

ただいたご遺体に接して初めて得られる医師、医療従事者としての自覚であるからです。医師、医療従事者にとって、肉眼解剖実習で担当させていただくご献体は、最初の「受持患者様」です。私自身は、臨床ではなく医学研究および顕微鏡を使う組織学教育を担当しており、現在は肉眼解剖実習に参加していませんが、学生時代に肉眼解剖実習を通して学んだこと、考えさせられたことは今だに覚えており、医学研究者、教育者としての重要な部分を形成しています。近年は、肉眼解剖実習について様々な問題が報告され、肉眼解剖実習のあり方について社会的に多くの議論が行われました。その中で、情報化が進んだ現代社会の中での医学教育における肉眼解剖実習のあり方について、「献体解剖倫理指針について」が策定され公表されたことはご存知の通りです。私たちはこの指針を遵守しながら、これまで同様に多くの方々のご協力のもとに、今後も時代の要請に応じた教育改革を行いながら、より良い医師、医療従事者、医学研究者の教育を行っていききたいと思えます。

追慕の辞

本日、ここに筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、筑波大学白菊会会員を代表いたしましたして、謹んで「追慕の辞」を捧げます。

医学の領域において、研究や診療面でのめざましい躍進のニュースが毎日のように報道されています。しかしながら、例えばガンの治療方法、治療薬・治療薬一つ採りましても、まだ多くの方々が悩み苦しんでおられることも事実です。更に、少子高齢化社会の中、死生観も多様となり、患者さんの気持ちに寄り添う医療がこれまで以上に求められているのではないのでしょうか。私たち白菊会会員は、それらに配慮される優れた医師や医療従事者の涵養をしなければとの強い思いから、私達は白菊会会員として献体登録いたしました。

解剖実習は、「献体」という尊い行為のもとに行われる「正常解剖」と呼ばれる解剖であり、医学を志す者にとって第一歩を踏み出す大変意義のある実



習であると思います。解剖実習に臨む学生さんは、人体を実際に自分の目で見て、手で触れて確かめ、その構造と機能を理解することで、解剖学における卓越した専門的能力と深い学識を充ち身に着けることができると思います。また同時にお身体を提供された方より「医の倫理」についても学ぶこととなり、それは人体そのものに畏敬の念を抱く

一方、生命の尊厳を身に沁みて実感し、生命観と倫理観を醸成することにつながります。

一口に「献体」と申しますが「自分の身体を大学に提供する勇気があるか」と問われたとき、献体を決断し実行することが、いかに大きな勇気を必要とする行為であるのかを、誰もが痛感することと思います。改めて先人たちの「決断と信念」に心より感謝を申し上げますと思います。

繰り返しになりますが、医学生の方々は人体の構造を充分理解し、さらには生命倫理を養い、社会の期待に応える立派な医師となる義務と責任がございます。それと同じく私たち白菊会会員は献体登録者として、人生の最後に「献体」を実行することで、この重大な責務を果たさなければなりません。そのため、私たちはこの想いが叶えられますよう、日々の生活を慎ましく過していく所存です。

最後に、ご遺族様、関係者の方々から正常解剖、病理解剖、法医解剖に對し、まして深くご理解を示されたことに敬意を申し上げますと共に、ご献体いた

きご遺志を全うなされた方々、また医学の為に貢献された故人の方々にご感謝を捧げ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。「追慕の辞」とさせていただきます。

令和六年十月九日

筑波大学白菊会会員代表

荷見修一

追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が執り行われるにあたり、解剖実習のために御献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、御献体くださいました白菊会会員の皆様、並びにご遺族の方々の深いご厚意により、今年五月中旬から六週間にわたる解剖実習を行うことができました。実習開始から早くも五カ月が経過し、季節は初夏から秋へと移り変わりました。

御遺体に初めてメスを入れた日から今日に至るまで、私たちは一つひとつ

の人体の構造を丁寧に見察し、医学生としての学びを得る機会をいただきました。この過程で、私たちは御献体くださった方々の人生の証であるお身体から学ぶことの重大な責任を痛感いたしました。

実習中、私たちは常に自問自答を繰り返しました。御献体くださった方々のご期待に応えられているだろうか。



より多くを学び、より深く理解しなければならぬという思いと、連日の長時間に及ぶ作業や膨大な情報量との格闘。その中で、時に心が折れそうになりながらも、懸命に学びを続けました。

この経験は、私たちに医療者としての覚悟と信念を深く刻み込むものとなりました。御献体くださった方々の崇高な遺志に想いを馳せ、目の前の構造以上に大きな学びを得ることができました。時に思うように進まず悔しさを感じることもありましたが、それもまた、医学を志す者としての決意を強くする糧となりました。

私たちは、この貴重な学びの機会を決して無駄にすることなく、心に刻んだ感謝と責任を胸に、今後も医学の道を邁進することをここに誓います。

最後に、御献体くださいました方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆様への計り知れないご厚意に深く感謝申し上げます。追慕の辞とさせていただきます。

令和六年十月九日

筑波大学医学群 医学類二年

田村 薫

会員のみなさまからの便り

思い通りにならない命

新井 久美子

母百一歳、弟七十四歳、二人一緒に慰霊式を挙げて頂く事になりました。本当に仲の良い母子でしたけれど、最後の日まで一緒とは誰も予想していませんでした。母は九十五歳を過ぎた頃から度々「死にたい、死にたい」と口に出し弟と私を困らせていました。病院からの処方箋を全部飲んでみたり、首をつるまねをしてみたり、そのたびに弟と私はドキドキハラハラ。病院で色々検査しましたが全て異常なしと先生に太鼓判を押される程元気でした。「新井さんは百二十歳ぐらいまで生きられるネ。でも百歳過ぎた人の資料が何も無いので比較する事が出来ないんですヨ」と先生がおっしゃっていました。こんな元気な体、何かお役に立てるならと献体の説明をすると即OK。八十歳で帰らぬ人となった父もアイバンク

に登録してしまいました。私が七十歳を過ぎた頃から度々弟とは献体の話をしていた。どこでどうしたら手続きが出るのか全く知識がありませんでした。そんな時、元気な母を残して弟が高熱を出し緊急入院。八カ月入院治療、危篤状態から目覚めてリハビリ。手や足を動かし元気になりたいという気持ちがピンピン伝わって来ましたが、残念ながら帰らぬ人になってしまいました。弟が元気な時、よく献体の話をしていた事を思い出し何としても登録したいと思ひ、私の七十五歳の誕生日に母と私の登録をする事が出来ました。それから一週間後、母百一歳の時肺炎で入院。その一週間後あんなに元気だった母も帰らぬ人になってしまいました。入院していた時の最後の言葉が「点滴の管がなければ病院の前の草を取ってあげられるのに」と言って看護師さんに話していました。ふしぎと母が亡くなったのに涙が出るより「良かったネ。やっと死ぬ事ができたネ。今度は先生になる人の為にお役にたてるネ」。そんな言葉を母に語りかけている私がいましました。私もこれから何歳まで生きられ

るかわかりませんが、登録する事が出来た体を大切に頑張っていこうと思う今日この頃です。

初恋・再会そして別れ

有賀文貴

私は小学校六年の時初恋をした。相手は学校の娘でA子といった。出会いは二期の始業式が行われた体育館で、彼女は行列の後方で花柄の鮮やかなスカート姿で立っていた。周囲の見た女子に比べハイカラで、近くでそれを見た私の胸は一気に熱くなった。この年の春小学校長が入れ替り、新任校長と共にその家族も当地へ越して来て、A子は転入して来たのだ。クラスは違ったがクラブ活動でA子と偶然一緒になり、初めて言葉を交した。卒業迄楽しく過したが中学へ進学して二年の春、父親の小学校長が他校へ転任となり、A子達家族も夏休み前に父親の転出先へ越して行った。中学校を卒業した私は、近隣のN町の男子高校へ入っ

たが或る時、友達と街中を歩いているとなんとバツタリA子と遭遇した。A子も友達と一緒にいた。A子は同じ町にある女子高の制服を着ていた。私はA子に会いたくて三年の時、A子が通う女子高の一般に開放された文化祭に出掛けた。そしてA子を探し出し教室の片隅でしばし雑談の後、校庭で行われたフォークダンスに参加し初めてA子の手を握った。その後二人の関係は途絶え時が流れて四十年後、東京に居た私に故郷の中学の同級生からクラス会の案内が届いた。同封されていた名簿の中にA子の名があった。私はその後数年毎に行われたクラス会に出席していたがA子は来なかった。六十歳を過ぎた時、クラス会を東京見物を兼ねてお江戸で行う事になり幹事に指名された。私は高校で別れて以来のA子に参加させる為、事前にA子に電話して東京に来るよう説得した。当日A子は現われて中学以来の再会となるクラスメイトと会話を楽しんでいた。私は隙を見てA子に近寄り初恋の人であった事を打ち明けた。一瞬A子は羞かしげに私を

見た。その後会う事は無かったが至近のクラス会でA子の訃報を聞き私は愕然とした。突然の別れだった。

解剖実習に臨む皆さまへ

井上 信二

四年前、宇宙生命論（先端技術研究機構：RIAT日諸賢一氏）に出会った。RIAT BLOG (<https://wordpress.riat.or.jp>)の記事を繰り返し読みながら、地球科学や地球医学の危うさに気がついた。宇宙や生命の真実にどこまで肉薄できるか、それが今の最大の関心事です。日諸氏の著書に、「銀河史上・下巻（二〇二三年刊）」があります。宇宙とは、渦運動による大小様々な生命を創造し成長させる生命生産工場だった。我々は、水の惑星の高等磁気生命体のようです。

人間生命とは、心・霊・魂・体の四要素から構成されています。心とは睡眠から目覚めて顕在意識が活動する力学動帯、霊とは自我の本体（潜在意識）

であり眠ることなく活動する磁気静帯、魂とは力学焦点を内包する肉体を囲む直径2m程の球状生体電磁場、体とは肉体です。心・霊が天空、魂・体が地上。心と魂、霊と体が天地で結ばれています。思考・判断・認知・記憶はすべて天空で作動し、魂・体は地上の出張所。自律神経の駆動電源は霊にあり、アストラル（非物質）の管が尾骶骨から脊柱管を通って大脳中央中脳水道にある脳脊髄液領域に達する。大脳基底核黒質網様部で電子磁束流を水素原子磁束流（生体電流）に変換して心臓を含む臓器に供給。運動神経は、水の六員環構造による水分子磁束流と意志伝達を司る力束流の二重構造。

死によって心が停止し数時間で霊・魂が肉体から離れます。体は亡骸となつて残りますが、そこには私は居ません。どうぞ、安心して解剖実習に取り組んでください。解剖実習は、人間生命のほんの一部に触れたに過ぎません。生きている人間には、四要素が複雑に絡み合っています。病気の真の原因や治療法も物質的肉体だけを診ても解らないものです。アストラル・形而上に原

因となる本質があることを念頭に演繹的細分化に偏らず帰納的全体俯瞰ができる医師になつてください。

地球は危機的状況にあります。

第一が太陽核反応異常。太陽からの光量がここ数年増大。地球温暖化を加速し大気中の水蒸気量が急激増加。豪雨や豪雪の主原因。第二が原子力発電による温排水（被曝水）の海洋・河川への投棄（五十年以上）。これが素粒子ラジカル（被曝水 \parallel 水分子を構成する水素原子中の電子が放射線で剥奪され水素原子核 \parallel 陽子がむき出し状態）を生み出し、海洋・河川・土壌を経由して食物連鎖で人体に入る。この素粒子ラジカルが癌や糖尿病の主原因。第三が地球コア磁場の減衰で地磁気が弱体化し以前は不活性だった病原体が活性化して地上生物を襲う。感染症の拡大。第四が地球の地殻岩盤の脆弱化による地殻崩落。地殻崩落が起きると、海洋とマントルが接触して水蒸気爆発を起し大気が失われ地上世界がマントルに飲み込まれる。二〇二五年七月五日（たつき諒）の予言のようなことが近い

将来起こるかも知れません。地球寿命の終焉が迫っています。九星気学では、九紫火星の年が危ないと言われており次に来るのが二〇二七年。

無題

大森重則

今年の夏はとても暑く、さすがにバテました。今年の夏が心配です。地球が人類に仕返しをしている様に思いませんね。

去年は良い事が有りました。市の芸術祭において見事教育長賞に初めて入賞しました。千波で外燈に雲を入れて望遠レンズでとらえた作品です。タイトルは、太宰治の本の中のろまん燈籠からいただいたて付けました。三十年ぶりの出品なので、とても嬉しいです。日々の努力が報われた気がします。市内の美術展や、図書館の美術書を読みあさって感性を磨いています。

でも、県の芸術祭は残念ながら落選しました。作品は、落ち葉のクロース

アップで、マクロレンズでとらえた写真です。タイトルは、木洩れ日と付けました。インパクトはあったと思うのですが、審査員の目には止まらなかつた様です。また今年の市の芸術祭入賞を目指してがんばりたいと思います。

九月にお客様の髪を切りに出張したのですが、五月に次女の容体が急変して亡くなったそうです。乳ガンでした。長男、長女は結婚して家庭を持ち、家を出ているので、次女が両親の面倒を見るつもりだったそうです。五十三歳で未婚でした。慰める言葉も見つかりませんでした。人の命は儂いものですね。

十二月は、インフルエンザの予防接種とコロナの予防接種を打ちました。どちらも有料で、各二千五百円と四千人かかりました。政府は、最初から有料にしておけば予算が足りなくならなかつたと思います。

そして、イスラエルのパレスチナ攻撃、ハマスの戦争、四万人を超える死者を数え、イスラエルのネタニヤフ首相は何を考えているのか。レバノンやイランが参戦し第三次大戦にでもな

れば、世界が減ぶかもしれません。イスラエルは、核兵器が数百発も有るのだから、そんな事を考えていると眠れなくなります。

無題

河野トシ子

前回の投稿で成ってくる事、現われてきた事、すべてよろこびに変えて生きるような答えを書けなかつたのは、特定の宗教を出してはいけないかとの思いでしたが、最後の投稿と思いつくのを承知で書いています。あれは天理教のおやさまの言葉のように思っています。其の昔ご在世当時のおやさまの処にたすけを求めて寄りくる人達に、病の元は心からと心をきれいにしよう、腹を立てなさんな、欲をはなれなされ、やさしい心になりなされと心のよごれを払うようにと教えられ、学者金持ちはおとまわしとどんな人もたすけられてすべて天のお与えやでと、天の恵みに生かされてる事を教えられた。心を

きれいにする事が幸せの原点と思われ
るが、よろこべない事ばかり多く不足
ばかりで暮らしているのに、不足は切
る理たんのうはつなぐ理と聞かされ、
たんのうはがまん、しんぼうではなく、
すべてよろこびに変えて生きる事と教
えられ、よろこばねば心に言い聞かせ
乍ら幾十年生きてくるうちに、少しづ
つよろこべるようになり、いつの間
に
か不足がなくなりみんなありがたく思
えるようになりました。今まで見えな
かった気がつかなかった事も、みんな
たすけて下さりお守り頂いてきたのだ
と思えるようになり、今は何の苦労も
心配もないありがたづくめの毎日を生
かされています。

九十七歳にもなって、もうどこへも
出かけられないと思っていたのに、孫
娘夫婦が町屋という処に家を買って住
んでいて、赤ちゃんが生まれ誕生祝に
息子の車に乗せられて東京へ久し振り
に連れて行ってもらい、みんなでたの
しくお祝いし一泊して横浜の娘の処に
行き、南部市場が近いので孫娘達と行っ
て回転ずしなど食べて、たのしく二泊
して帰りは横浜の町を海から眺め、東

北海道をひた走りのしいドライブをさ
せてもらい夢のようでした。こんな事
をさせてもらえぬ年寄りあまり居な
いのだと思ひ乍ら、無学でも神様の
教えを守って頑張つて生きてきたご褒
美かしらと思えて、ありがたくよろこ
び抱いてあの世へ行きます。みな様あ
りがとうございました。

理想の死に方

小林 美枝子

先日、交差点を青信号で渡っていた
ら、信号無視の車に路上に投げ飛ばさ
れました。運ばれる救急車の中で「今
回は白菊会への連絡は必要なさそうだ」
と考えている自分がいました。

今回の交通事故は骨折もなく全身の
痛みだけですみましたが、いつものよ
うにして死亡するかは誰にも分かりま
せん。

献体登録をしていたものの、孤独死
で発見されるまで日にちがたち、献体
には至らなかつたなどはありそうです。

いつも会報をお送り下さつても、お
役に立たない時はご勘弁ください。

長年「楽しい夢を見ながら旅立てる
薬があればいいのに！」と願う私は、
「今日はいいい天気！死ぬにはもってこ
いの日だ」と気持ちよく死ねたらと夢見
ています。

七十歳になつたらそのような薬を希
望する国民に配布されたら最高！と、
妄想する日々です。

自分で納得出来る

死を迎えたい

佐々木 利 男

この世に生きている限り、私たちの
人生はいつも死と隣り合わせです。身
近な死をどう迎えるかは、その人にと
り重大な課題です。それだけに、日頃
から死に向き合い死を快く受け入れる
気概を持つように、自分自身を誘導す
る必要があります。死を前向きなこと
として、とらえる必要があります。夏
目漱石の言葉に、死は生よりも尊い。

正しく生きること以上に死んで逝くことが、厳粛で尊いのではないでしょうか。

自分自身が生きている限り、亡き人への思いを忘れることなく偲び、もし死後の世界があるならば、ご冥福を祈り捧げたいです。

戦争や事故などによる死ではなく、あくまでも自分自身が納得して死を迎えることが出来る死であって欲しいです。死は、正しく貴重で厳粛な一生涯の最大の行事です。

埧 塙

佐藤 怜子

いつの間にか辿り着いたこの地に紛れもなく立っている。長い年月、九十九折の道すがら、あちらに迷いこちらにぶつかりして出来たひとつひとつの欠片をガラス瓶に詰め、ソノラ砂漠のサボテンのように身構えた私が此処に立っている。そして、考える。あ

数年後の今、育ててくれたあらゆる栄養素に心から感謝を捧げ形の見えない勲章を襟元に留めよう。眩き続けた念術も嵐の渦に放り投げ、傷ついた身で辿り着いた此処が「雨のち晴れ」の幸いの地の証明なのかもしれない。それは恐らく、マラソンランナーの如く走り続けた者の誉れに相違ない。又、気付きの扉を開け放った際の心地良い安らぎであり、存在と慰めの承認でもあり正に稀有な邂逅でもあったのだと会得する。更に、過去の生きた歴史を手繰り寄せ思わず頬ずりを繰り返す。これほどまでに与えられた生命の存在と限られた時間への深い慈しみと畏れ。まるで、揺れ動く魂を捕まえて粘土で型を造るように、様々な材料をこね合せ完成されたスタイルを守り、育んでいくことの溜息と憧憬。それでも尚、与えられた道が未だ残されていることに身を震わせながら、不完全な儘の私その者であることを多くの方々に微笑の種子を振り撒こう。

地球誕生以来、生まれた人間の総人口は約一〇八〇億人とのこと。想像力を以てしても遥かに及ぶものではないが今の私の存在が長い長い巻物のように縷々と繋がり、そのLINKのなかで受け継がれてきた事の重さは計り知れない。一人一人の尊い生命が生まれては去りゆき次の世代へと受け継がれていく。余りにも膨大な歴史の中に私自身の息吹が凝縮され一粒の雫となって消え去り、やがて、時を経て私を知る人々は全て存在しなくなる。それ故、壮大な地球規模の僅かな間のパスポートを無為にしてはならないけれど、心の中で渦巻いているものが耳元で囁く。「私自身の存在は己の意思が不在」のままに存在することの命とは何か。声の出せない魂が主を探してはいないだろうか。尚、現在、幾つもの国々での戦乱が絶えることがない。その争いの中では人間の尊厳性や倫理観が蹂躪され続け、尚、狂おしいほどの諦念の底に引きずり込まれ、人間性そのものが抹消されていく。又「No!」と叫ぶことさえ叶わない空の下で無差別に殺戮されていき、命の存在そのものの証明が危ぶまれている。ドイツの哲学者カール・マルクスの言葉とされる「歴史は繰り返す」の言葉が風の如く通り過ぎてい

く。何故、私たちは平和への道に導けないのか。天と地が分かれているように人種や宗教や言葉が壁となり神の意志さえも不明の儘、微笑が覆い隠され敵対する。この空の下で奇跡を願う多くの人々に心からの祈りを込めて。

思い出

高橋 利子

第一回目の筑波大学白菊会総会の参加者の記念写真には、小学一年生の息子が写っています。少しだけ熱を出して学校を休んだのですが、私の母と留守番ができず、正式会員の父と随行の私、そしておまけの息子の三人で白菊会に参加しました。今となってはそれも良い思い出です。

第三回目からは両親と私、三人が正式会員になり、行き帰りのドライブを楽しみながら毎回参加したものです。実はあの時の息子、病気になるまで筑波大学病院で看護師として働いていました。あの時のお詫びと恩返しが少ない

だけ出来たのかも知れません。

私が三十代なかばの時、追慕の辞を讀ませていただきました。若かったこともあり、ものめずらしそうに声をかけてきた方もいらっしやいました。その数年前に父も追慕の辞を讀み、親子で素晴らしい体験をさせていただき本当に感謝でした。

さらに、当時私は市民記者もしていたので、市報に献体のことを書き市民の皆さんにも知ってもらうように努めました。今では献体も知られるようになりましたが、その時の友人達の反応は『やっぱりアンタ、変わってるね』でした。

大正生まれの父が、いつ、どこで、どうやって献体を知ったのか今となってはわかりませんが、人生最期にして最大のボランティア活動だと言っていました。

昔は小学校(初等科)でさえ行くこともままならない時代を生きてきた父は『俺も大学へ入れる。しかも筑波大学だ』とうれしそうに話していました。おかげ様で父も母も『筑波大学献体学科』を無事に卒業させていただきまし

た。

両親のあとをついで腹話術ボランティアをしている私を、天国から「ガンバレよ」と見守って、応援してくれているように感じています。いつでも私は、お人形めぐちゃんと一緒に、障害のある子もない子も、大人も、じいちゃんもばあちゃんも仲間も友人も先輩もみんな楽しんでいきます。そして感謝しています。

父さん母さん、だから私は大丈夫！

小さな旅

初めての二枚の切符

高橋 睦子

平成四年二月中旬の或る日の事でした。それは主人と私に二人分の指定席がついた急行券と乗車券の二枚の切符と、電車の時間と乗りかえホームの番号が細かく記入された、就職一年生の息子からのプレゼントでした。

私は結婚後専業主婦となり三人の子育てに追われ、子供達に東京の大学へ

の仕送りが精一杯で、急行券を持って旅行に行く事等考えられませんでした。群馬と上野は約一時間半、急行券の必要もありませんでした。でも「いつか私も二枚の切符を持って電車に乗ってみたい」と息子の前で口にしていた愚かな母だったのでしよう。息子は私のこんな愚痴を聞いて就職したら「両親に急行券つきの切符を送ってあげよう」と決心していたのでしよう。就職して一年にもならない二月偕楽園の梅がきれいに咲きほこる頃、急行券つきの二枚の切符を送ってくれたのです。初めて二枚の切符を手にした時、息子の優しい心づかいに対し、あふれる涙をおさえる事は出来ませんでした。当日息子は駅で待っていてくれました。咲きほこる梅の花が優しい息子の気持を思うと涙でかすみました。

海なし県で育った私は、翌日広々とした日立の海岸に打ち寄せては返す白波を時間も忘れ眺めていました。帰りも駅迄送ってもらい、メモを見乍ら家にとどり着いた時、私は最高の幸福感に浸っている自分を幸せだと思いました。

月日が流れ人との楽しい出会いがあり又悲しい別れもあり、私はついに「肺がん」になりました。しかし私はすばらしいお医者様に恵まれ手術は成功しました。一年後今度は子供や孫達と息子の新築祝に、袋田の滝で一夜をすごす事が出来ました。初めて二枚の切符を持って「スーパーひたち」に乗った時とは異なった気持で家族旅行が出来た事をうれしく思っています。その後二枚の切符を持って旅行する機会もありましたが、やはり息子が送ってくれた初めての二枚の切符を生忘れれる事はありません。

九十一歳の人生

内藤 佳子

自分ではこの年まで生きられるとは思っていませんでした。なぜかと云うと、私の身内は皆早死になのです。

私の御先祖様は江戸時代から続いた家なのですが、私がこの世にいないなれば何百年続いたのも終わりになりま

す。それを考えるとさみしく思います。私がこうして長生きしているのも御先祖様に生かされているのだと思っています。

おかげ様で私は今の所どこも悪い所がないのです。何もありませんけれど、身体が私の財産です。もう少しがんばって生きていくつもりです。

私のあいさつ

中山 たか子

三年前、急激な胸から背中にもつきさされたようなはげしい痛み、ウンウンうなっているだけで痛いとも言えない。

救急車の中で、頭だけはしっかりしていたのか、神様この痛みはがまんできな。早く死なせてとそればかり祈っていました。

家から三十分くらいの所の病院に運ばれ痛み止めと検査をした結果、大動脈解離だと云うことがわかりましたが、近くの病院が夜だということもあり、

心臓の先生がいらっしやらないと云うことで千葉の病院まで搬送されました。

病院まで着くあいだにも、どんな遠くの病院に行くのかそれまでには死ぬのか、そんなことばかり考えていました。病院につき大動脈解離って石原裕次郎と同じ病氣大丈夫がんばろう。そう言われたら、あれほど早く死なせと祈っていた私が、裕次郎が手術したのは、三十年以上も前のこと、あれからでは医学もずっと進歩しているのだから私生きられるかも、そう思ったら眠り込んだのかそれからはなにも覚えてなくて、気がついたのは八時間もかかった手術が終わってからです。

コロナで大変な中、誰にも逢えず、体じゅうチューブだらけでベッドにくくりつけられ、自由なのは言葉だけでICUに七日間。それでも先生や看護師さんにかける言葉は「中山さんは我慢強いですね、ほかの人より元気ですね」その言葉に勇気づけられ「はい、口だけは元気です」と返事していました。

その後、退院してから一人暮らしの私に安否確認の電話が娘と妹からあり

ます「はい、生きているよ、口だけは元気だよ」これが私のあいさつです。

無題

野口昌俊

今は健康第一に考えて、朝起きると家の中にある健康機具で体を動かし、散歩もいっぱいします。家にもどると、テレビを見て時間を過ごします。でも口が寂しいのか、甘い物に手がいくようです。糖尿病なのであまり食べ過ぎないようにしています。つい食べてしまうようです。だから、最近では買い置きも考えて、少しにしておきます。また、運転免許証も自分で警察に歩いて返納に行きました。買い物にも歩いて行きます。このように毎日歩いています。雨の日は散歩をやめると、その晩は足のしびれが出て、寝れないと言っています。やっぱり歩くことはいいみたいです。

食事は野菜が中心で、シイタケが好きで何にでもシイタケを入れているよ

うに言われます。そこでシイタケは体に良いのですか？

今は散歩がいちばん良いみたいです。一日五〇〇〇歩以上は歩いています。

無題

長谷川愛子

私も週二回デイサービスに通っています。週二回の人と人の対話ですが、環境が変わり精神的に大きく癒されます。元気であることはだれも見極めておりますが、最後の一瞬はわかりません。でも私達は白菊会に登録してありますので、安心して行ける考えで日常の体は何もわからないが、医学の最大のお役に立てるのだと思ひ淋しくもなく、国のためにお役に立てるのだと身を呈し、全て成就して生きることに喜びを持って行動し、無事故で献体が出来る様に体を健全に管理して参ります。本年九十一歳、我が身の元気なのを誇りとして献体が出来るまで頑張っています。

健康第一の 家訓が導いた献体登録

早川 幸雄

父は私が幼い頃に肺結核で生死の淵を彷徨いましたが、外国で創薬された特効薬のお陰で奇跡的に命を取り留めました。重篤だったため健康は元のように回復することなく、昇進も何もかも諦め家族のため年金を受給できるまで生き抜くだけの一生に終わりました。その影響は家計面にも表れ姉達は望んだ進学も叶わず、中学を卒業すると住み込みで働く道を余儀なくされました。その為、我家には『一に健康二に健康』と言う無言の家訓が根付きました。

小学生の頃に図書館で読む本は、謂わば自然に病気や薬の発見に携わった外国や日本の偉人に関する伝記本が常でした。将来を見据える年頃に成ると医師への強い思いが募りましたが、浪人も下宿も許されない進学事情に加えて姉達の苦悩や辛酸また無念さ思うと受験を諦めざるを得ませんでした。挑

戦から逃避した自分の不甲斐なさを悔やむ思いが完全に消え去ることは無く、奇しくも過去の思いが蘇ったのは二歳上の兄が治療の術も無い間質性肺炎により闘病を余儀なくされた際で、若しも医師に成っていたならば他に何か手立てを打てたのではと思いかからず。只、近頃に至って救われるのは密かに抱き続けていた夢が新たな形で叶おうとしています。目下医学生五年の孫が臨床実習に励んでおり国家試験合格後の研修医を経て名実共の医師となるまでには未だ道半ばですが、悲惨な戦争等に窮地しても奮闘奔走する国境なき医師団や妻共々尊敬して止まない故中村哲医師の様に、利や名を追わず人々のために尽せる医師を目指して呉れたならと願いながら応援したいと思っています。

私が献体を志した端緒は父を救った医学や医薬のみならず先人への感謝また病等に倒れ人並みの幸せや将来をも奪われた本人は素より家族にまで苦悩や無念さが連鎖して欲しくないの思いかからず。十八年前の入会から変わらぬ気概で、いつの日か私の体が医学

教育と医学の発展の一助になれば本懐です。

これからの日々

吉葉 八重

「おはようございます」「皆様お元気で過ごしてましたか？」で始まる体操教室。三十数人の参加者（内訳七十歳以上）開始する前の賑やかな事。お喋りに華咲かせて、病気の話のオンパレード。家から一歩外に出てこの会場に向くという行動を見て私も元気をもらいます。

定時に始まり個々の説明、誤嚥体操、発声練習などを行います。人前で分かりやすく説明する事に徐々に慣れてくる中、緊張します。それでも毎回体操が違うので難しくて勉強中です。ほかにも、さわやか教室、シニア教室は講師を迎えての座学、コミュニケーション、レクリエーション、頭の体操と異なる事を行います。老人クラブ（主に認知予防）では、盆踊り、頭の体操、

ゲーム、ストレッチなど行います。

各教室では怪我や事故が起こらないようにスタッフと見守りをしています。終わった後、参加者の方々は「頭すっきり。体がかかるくなったわ」「次回も楽しみです」「ありがとうございました」と皆さん教室を後にしますが「ランチどこに行く?」と、まだまだ元気な方々もいらつしゃいます。見送りしてから、後片付け、ミーティング、次回の予習、報告書を提出します。心地よい疲れが残ります。

買い物に行った時など時々「こんにちは、いつもお世話になってます」「○○さん、先生」と声をかけられる事が度々有ります。一瞬どこの教室?頭の中を駆け巡り、少し経って「えー、まあ、お元気でしたか?」答えているうちに段々と分かってきます。何て良くあることになってしまいました。心の声(相手の人は私を分かっても、各教室参加者の方すべては覚えられませーん)

家に帰れば独居老人です。農家が多い地区なので活動を始めた頃は、免許返納して乗り合いタクシーで各教室に

出向いて活動していると「お金にもならないのに何つまらないことやっていの」色々誹謗中傷のひどかったこと。最近では終息してきました。たまに孫(二十代)の訪問で心地よいお喋り。現代の物の考え方、ドライブ、ランチと楽しい時間を過ごすことが出来ています。

各教室の人々との触れ合いや、参加者の皆さんに勉強して分かりやすく説明、お話しすることに心掛けています。外出すれば参加者の方々に会えてお話し出来て嬉しいです(決して一人では無いと思える日々です)。

健康へのお手伝いを続けて最後のビッグイベント、献体のボランティアです。



解剖実習を終えて

伊藤 悠翔

六月二十日をもっておよそ六週間の解剖実習を無事終えることができた。実習が始まる前、私は実際に「人体を解剖する」という実感が湧かず、どこか浮ついた日々を過ごしていた。しかし、解剖実習室に足を踏み入れた瞬間、実習室に漂う異様な緊張感に圧倒され、ご遺体を解剖させていただくという責任を身に染みて感じるようになった。

事前のショートレクチャーで解剖実習が多数の無償のご遺体によって成り立っていることを学んだ。それは私にとつてとても衝撃的なことだった。自分、または家族が亡くなってしまった場合、献体を選択できるかと問われれば、躊躇する人が多いだろう。にもかかわらず、医学の将来のため、私達医学生の勉強のためにご遺体いただいた故人やそのご遺族のことを思うと自然と背筋が伸び、解剖実習に対する姿勢も引き締まった。

解剖実習が進むにつれ、人体構造の多様性に非常に驚かされた。実習が始まる前、先生がよくこう仰っていた。「皆さんの先生は皆さんの目の前にあるご遺体です」この言葉に真意は解剖を始めて一、二週間たったあたりから痛感するようになった。皮の厚み、脂肪の多さ、臓器の大きさや形、そして特に神経の走行、これらはいずれも個体差があり多様性に富んでいた。例としては、腰神経叢が挙げられる。アトラスや解剖実習の手引きで事前学習してきた分枝の仕方と、実際に剖出した腰神経叢の走行では異なる点がいくつかあった。また、体の左右においても左側では教科書に沿った走行をしているのに、右側では異なる走行をしていることもあった。

これらの経験からまず感じたことは、人体の構造の神秘についてである。数百個といった骨や筋肉、そして無数の神経をある程度の違いはあれど人間は皆その構造をもっている。これはとても凄いことではないだろうか。精子と卵子が出会い、受精してから胎児へと変わっていく段階で、皆同じような構

造と機能を獲得していく。まさに生命の奇跡である。今後もこの神秘を怠けることなく真摯に向き合い学んでいこうと思った。

さらに教科書のみを勉強していても一人前の医師にはなれないということも学んだ。「皆さんの先生は皆さんの目の前にあるご遺体です」この言葉のよりに人はそれぞれ異なる構造を持つ。それはつまり、臨床においても病状や薬の効き方、回復の速度は人それぞれであるということだ。私たちが臨床で向き合うのは「病名」ではなく、「その人」自身である。臨床の現場では教科書的な知識を礎として、目の前の患者さんを総合的に理解することが必要不可欠であると痛感した。

この六週間の解剖実習を経て、人体の構造の学問的知識はもちろん、医師となるための基本的な姿勢も学ぶことができた。この経験を糧にしてこれからより一層精進していきたいと思う。

須藤 有菜

解剖実習を終えてから、今でも最も心に残っている場面、それは、初日のご遺体と初めて対面した場面である。解剖実習が始まる月曜日、今日から解剖が始まるという覚悟を持たなければいけない、という漠然とした責任感を感じながら学校へ向かった。しかし、そんな責任感よりも、大きかったものは恐怖であった。今まで亡くなった方のご遺体を見たのは、小さいころに叔母の葬式でお別れした時のみであった。小さかったのに鮮明に覚えている。たくさん遊んでくれて、優しかった叔母さんは、私の母、祖母にとっても大切な存在であり、死を迎えたことなど信じがたいものだった。どのご遺体もこのように家族から愛し愛され、様々な人生を送ってきた方々なのである。死んでいる「人」と長時間向き合うという今までにない経験に、心から怖いと思ったし、これから六週間もやっていくのかという思いでいっぱいであった。

解剖実習室に入ると、そこには布に

包まれたご遺体がいくつもの解剖台に乗せられていた。そこにいる医学生、みんなが緊張した面持ちで、暗い空気の中座っていた。先生の説明の後、ご遺体と対面する時が来た。布を外すと、そこには、やはり動いている、生きている人間とは異なっていて、でも生きているときの笑っている顔、動いている姿が見えてくるような、そんな方が



慰霊塔 (納骨堂)

いらっしやった。優しいお顔をされていた。年齢はほとんど私の祖母と同じくらいである。ご遺体と対面して改めて、ご本人、そしてご家族がどのような思いで、お身体を私たちに預けて下さったのかということ想像し、感謝の気持ち、尊敬の気持ちでいっぱいになった。祖母などの家族が亡くなった後、私はこんな風にそれを許すことが出来るのだろうか。想像しただけで心苦しい。それでも、医療に対する感謝を伝えたい。また、医療の発展に貢献したいと思っただけで、決断して下さったのだということ、本人の意見を尊重しようと受け入れて下さったこと、全てに感謝していかねばならない。そして、その思い、期待されている責任を自分が背負い、果たさなければならぬのだという強い思いが、湧いてきたのであった。

そのような思いが湧いても尚、精神的な重さ、厳しさはやはりあった。特に最初の一週間。しかし、解剖を行っているうちに、先ほど述べたような責任感を実感し始めたとともに、生きている人間と死んでいる人間の体の構造

に変化はなく、生命の原理である死を怖がりすぎる必要はないという思いや、医師になるものとして、怖がっている、精神的に弱っている場合ではなく、しっかりご遺体からすべてを学び取ろうという気持ちが湧いてきたのであった。

振り返ると、本当にこの六週間は精神的、肉体的にも厳しい期間であったが、この実習は、倫理観、知識、様々な観点で今後人生の中で学ぶことのできないような貴重な機会であった。この実習に関わって下さったすべての方々に感謝を伝えたい。そして、これからの人生において、この経験を生かしていくことを約束したい。

武 中 俊 樹

「俺が解剖してよかったのか」

六月二十日、解剖実習室を出たときに最初に発した言葉だ。やりきれただろうか？いや、胸を張ってそう言える自信はない。ただただ情けなさと、ご献体くださった方とそのご遺族に対して恥ずかしさと罪悪感を覚えた。人体

構造の全貌を学ぶには、それがたとえば基礎的な範囲だったとしても、少なくとも私にはあまりにも短すぎた六週間だった。

五月十一日、明日から始まる長い六週間の解剖実習を前に、白菊会会報に掲載されている「解剖実習を終えて」を眺めていた。大きな期待感と、そしてある種の不安があった。

期待感とはその言葉の通り、実際にこの目で人体を観察することができること、強烈なアウトプットができることである。座学で学ぶどんな知識も、この目で見る記憶には到底及ばない。不安とは端的に「私が解剖をしてよいのか」という問いである。自らのご遺体を医学の発展のために未熟な医学生に捧げてくださるその尊いご遺志に対して、私自身が真摯に応えられるのかという責任感から生じるものである。法的には解剖を行う権利が与えられている。しかし、問題は私自身にその覚悟があるかどうかであった。

私には情熱をもって真剣に取り組み毎日の部活があった。遊び半分でないからこそ、両立が大変であることは容

易に想像できた。その実、周囲の優秀な医学生に比べて圧倒的に予習・復習の量が足りず、その場で学びながら、友人に尋ねながら剖出を進める日も多かった。

五月の半ば、私は予習が追い付かない現状に対して、先生にカリキュラムに対して疑問を呈した。

「なぜ筑波大学のカリキュラムはこんな講義としての予習が少ないのですか？」

「それは最初に解剖実習のカリキュラムを考えた教授が実践的な学びの方を優先したからですね」

その時はすんなりと頷くことは出来なかったが、解剖実習が終わった今、自分なりに解釈してみたい。結論から言うと、¹医学生自身の真摯さを問うているのだと思う。全員が事前に横一列に知識を入れた状態で解剖実習を行った方が大学側の教育という観点では良いことは間違いない。しかしそれは受動的な学びであり、医学生自身の「自発的な学びの姿勢」を奪うことになる。どれくらい予習・復習をして解剖実習に臨むのか、解剖実習中にどこま

で正確に剖出するのか、教科書に載っていない構造について思考するべきか、他のご遺体と比較して学びを深めるべきか、周囲の優秀な医学生に追いつこうと必死に食らいつくのか。すべて医学生自身の裁量に任されることになる。解剖実習は試験に向けた勉強のように、明確なゴールと道筋が用意されているわけではない。誰かが尻を叩いてくれ



令和六年度慰霊式（会場風景）

るわけでもない。だからこそ、自分がどれほど医学生として真摯であるかを問われているのだと考える。

最後に、ご献体いただいた故人とそ
のご遺族の方々をはじめとし、真摯に
ご指導くださった先生方、共に実習を
乗り越えてくれた班員、そして解剖実
習を支えてくださった全ての方々に、
この場を借りて感謝申し上げます。

中西彩菜

解剖実習の初日、ネル布に包まれた
ご遺体がずらりと並ぶ実習室で、私た
ちはまず初めに解剖実習の法的位置づ
けについて説明を受けた。私たち医学
生はご遺体の解剖というセンシティブ
な行為を特別に許されている立場であ
るということ。だからこそ、ご献体い
ただいた方の尊厳を決して傷つけては
ならないこと。その重みを知り、医学
生として得た学ぶ権利と責任の大きさ
を改めて実感した。将来、医師になれば、
患者に様々な医療行為を施すことが社
会的に許されるようになる。しかしそ

れは、同時に大きな責任を負うことでも
ある。解剖実習はそうした医師として
の責任を初めて自覚する機会である
ように感じた。

実習期間中は毎日が学びの連続であ
った。人体は複雑であるということ
は誰もが知っているだろうが、実際
にご遺体と向き合ってみると、それま
で自分では想像がつかなかったほど人
体が複雑難解なつくりをしていること
に驚いた。いくら事前に教科書や図譜
で予習をしても、実物を前にするとど
れがどの構造か判別できず、まるで初
めて訪れた土地で地図を片手に迷子に
なっているような感覚が最終日まで続
いた。しかし、固定されたご遺体でさ
えこれほど難解なのだから、絶えずダ
イナミックな生命活動を続ける生きた
患者の体はもつと複雑に見えるだろう。
そう考えると、今ここで目の前の構造
を理解しておかなければこの先の医学
の学びに繋がらないという危機感が湧
いた。その危機感に後押しされながら、
諦めずにご遺体と向き合い続けた結果、
多くのことを学ぶことができた。実習
室から帰ってきて風呂に入り、鏡に映っ

た自分の体を見ると、その日に解剖し
た部位の皮膚の下にあるものが透けて
見えるような錯覚を覚え、人体に対す
る解像度が高まったことを実感して嬉
しくなった。

実習に少しずつ慣れ始めたある日の
ことだ。その日は足底に取り組む日で、
他の部位よりも皮膚が固いため作業に
苦勞していた。その気づきを班員に伝
えると、班員は「何十年もこの体を支
えてきた足だからね」と零した。その
言葉に私ははっとさせられた。この方
にも、まだ足底の柔らかい、赤ん坊の
時代があったはずだ。やがて自分の足
で立つようになり、それから何十年と、
あらゆる土地を踏みしめ、体を支え続
けてきた、いわばこの方の歩んできた
歴史の結晶こそが足底の固さであった。
足底だけではない。手が、顔が、臓器が、
体を構成する全てが、何十年というそ
の人の生きてきた歴史の果てにあるも
のだということを想像し、なんとこの
尊いものに触れさせていただいている
のだろうと感じた。解剖をただの作業
のように感じ始めていた自分が恥ずか
しく思えた。それからは一層身が引き

締まる思いで、ご遺体の全てから学びを得ようと使命感を持って実習に取り組んだ。

改めまして、ご献体くださった故人とご遺族の皆さまに心より感謝を申し上げるとともに、故人のご冥福をお祈りいたします。貴重な学びの機会をありがとうございました。

丸山 美彩音

解剖実習室へ足を踏み入れたその先は静かで厳かな空気に包まれていた。実習初日、私はしばらくご遺体にメスを入れることができなかった。命を扱う責任の重大さをこれまで以上に実感した瞬間だった。今まで体内のメカニズムや構造を机上で学んできたが、解剖実習で初めて人間の命に触れ自分が医師になるのだということ強く認識した。その夜、「筑波しらぎく」を読んだ。私はある決意をした。会報には一人ひとりの経験されてきたことや想いがつづられていた。これから六週間、ご遺体の先生は自身の大事なお身体と生

き方をもって私たちに様々なことを教えてくださる。そのご厚意に感謝してきる限り多くのことを学ばせていただくように心に決めた。

実習では神経の走行や血管の分岐の仕方などがアトラスと異なることが多々あり、苦戦した。しかしそのような時、班員と話し合ったり他班の人の意見共有をしたり、先生方や技術職員の方々のご指導を仰ぎながら解剖、同定を進めていくことができた。多くの方々に支えられた毎日だった。そして「人の体は教科書通りにはなっておらず個人差がある」ということに気づかされた日々だった。実習期間の途中で指が腱鞘炎になり手袋が入らないほど腫れてしまったが、病院で医師から説明をきいた時、解剖実習前ではふわりとしか理解できなかったであろう言葉や体の仕組みが理解できて興奮した。私の頭の中でスクリーンとして映し出されたのは、アトラスのような平面な図ではなく立体的な人体の構造であり、実習で学んできたことが身についていると実感し深い喜びを感じた。

この六週間は覚えることが多く大

変な日々であるときいていたが、それだけではなく私にとって実際に自分の目で見て手を動かし、知識と理解を結びつけていく充実したかけがえのない日々だったと感じている。一人ひとり個性が異なることと同じように体の構造にも個体差があり筋肉の厚みや臓器の大きさ・重さ、血管や神経の走行、分岐の仕方がそれぞれ違っていた。一



令和六年度慰霊式（遺族の献花）

人の人間として生まれ人生を歩まれてきたのだと思うと人体の緻密さ、複雑さに感動させられた。

納棺式での最後の黙祷で私は胸に込め上げてくるものがあつた。多くの方々に支えられて六週を終えることができたという感謝の気持ちでいっぱいになった。人の命、お身体に懸命に向き合うということは将来医師になってからも続く。ご遺体の先生は、私に今後医師として患者一人ひとりに真摯に向き合っていかなければならない大切さを改めて教えてくださった。

最後になりますが、ご献体くださった故人とそのご遺族、支えてくださった先生方、技術職員の方々、班員、家族に心から感謝申し上げます。このような貴重な機会を与えてくださったすべての方々に感謝し、患者さんの身体だけではなくその人の人生全体に寄り添える医師になれるよう日々努力してまいりたいと思います。

宮城 希々子

解剖実習が始まる前日、私は解剖実習に必要な教材や器具を準備しながら不安でいっぱいだった。これから始まる六週間に耐えられるのだろうか、膨大な暗記量をこなせるのだろうか。なによりも今までの座学とは異なり、ご献体いただいたご遺体を用いての学習という未知の世界に足を踏み入れることに戸惑いがあった。

実習初日、解剖実習室に入りずらつと並んだ菊の花が添えられたご遺体の前にして、前日に感じた不安は覚悟へと変わった。実習を通してご遺体から学べる限りのことを学べるように努力を怠つてはいけなさと感じた。

実習が始まって一週間は作業に手間取る上にご遺体にメスを入れることへの躊躇があり、なかなか思うように学習を進めることができなかった。今までの講義とは異なり、自分から学ぼうとしないと何も得られないと感じ、実習前の予習を徹底し「どこをどのよう

に探せば目的のものが見つかるか」を意識するとともに、その日に扱った範囲はその日中に復習し疑問点を解決するように心掛けた。実習を通して感じたのは、誰一人として同じ人はいないということである。もちろん実生活の中で顔や体形など外から見える面でも同じ人がいないのは感じられるが、解剖実習を通して体の内面からも十人十色であると知ることができた。具体的には、血管・神経の走行、内臓の大きさや位置などである。アトラスはあくまで一般的な情報が書かれているので実際自分のご遺体がすべてアトラス通りということはないし、ご遺体が異なれば全く見え方が異なるのだと改めて感じた。

最初の一週間が終わった後はあつという間に残りの五週間が過ぎていた。実習前に想像していた以上に解剖実習が自分の生活の大半を占めるようになり、徐々に知識が増えるにつれて実習中に得られるものも増えていった。最後の二週間は細かい作業に加えて狭い範囲に膨大な知識量を必要としたので心が折れそうになったが、初日に覚悟を決めたように学べる限りのことを学ばなければと自分を奮立たせた。

六週間の実習の中で最も心に強く刻まれているのは実習最終日である。それまでの実習では私たちの「先生」としてたくさんのことを学ばせていただいた。しかし、最終日納棺する際には「先生」ではなく、ご献体いただいた一人の人として、その方の人生を深く感じた。改めてご献体いただいた方の尊さとありがたさを感じた瞬間であった。

印象深く残っている言葉がある。「解剖実習はご献体いただいた方の人生を感じる事ができる」という言葉である。筋肉の付き方や各内臓の様子からその方がどのような人生を歩んできたのかが少しではあるが想像でき、私たちはそれを感じながら実習をしなければならぬと思った。今後医師になっても患者さんそれぞれに人生があり、私たちはそれを最大限理解しながら関わるべきだと感じた。

最後にはなりましたが、ご献体いただいた故人とご家族の尊い意思に心から感謝いたします。また、解剖実習を支えてくださった先生方や技術職員の方々にお礼申し上げます。

百瀬麻侷

初めて解剖実習室に入った時の空気分、そして、ご遺体と向き合ったときの全身鳥肌が立つようなあの感覚は感想文を書いている今でも忘れられない。不安や緊張といった言葉では表すことのできない、未知の世界に踏み込んだような不思議な感覚を覚えた。実習がはじまると、深い感謝と敬意が湧いてくるとともに、医者を目指す医学生としての責任を強く感じた。単に「医学を学びたい者」として解剖実習を行わせていただくのではなく、「将来医療に貢献する者」として、学べることを全て吸収しようと強く意識するようになった。莫大な学習項目を前に、学んでも学んでも新たな疑問が浮かび、どれだけ念入りに予習しても実習中にはわからない点が山のようにあった。ゴールの見えない日々は精神的にも体力的にもしんどかったが、毎日たくさんの学びを得て確実に充実していた。今振り返っても六週間の解剖実習は決して楽なものではなかったが、多くのことを学ばせていただいたと同時に命の尊

さに触れ、医学生としての自覚が芽生え、非常に貴重な経験となった。

特に印象に残っているのは血管や神経の走行と役割である。全身中に神経や血管がくまなく巡っていることは想像できたが、やはり実際に解剖をし、その様子を確認すると、現物として自分の中での知識を定着させることができたように感じる。教科書では確認できないような細かい血管の分岐やその終着点を確認できた。また、それまで曖昧だった神経についても明確なイメージを持てるようになった。「神経伝達物質が情報伝達を行い〇〇といった役割を担う」と言葉としては理解したつもりでも、実際に神経がどのような形をしたものなのか、化学物質が情報を伝えるというのがどういうことなのか、伝達物質によって役割が異なるというのも、いまいちよくわからなかった。しかし、解剖実習を経て神経そのものやその分岐・走行をこの目で確認してから、神経伝達という曖昧なイメージが、もう少し具体性を持った知識となり、神経という概念が自分の中で腑に落ちた。脳神経の解剖は非常

に興味深かった。自力で神経を綺麗に剖出できたときの興奮は忘れられない。教科書だけでは学べないことがあると強く実感し、本実習で得た学びを今後の学習にも活かしたいと思った。

長いようで短かった解剖実習を終え、多くの医学的事項を学ぶことができたのはもちろんだが、何よりも医学生としての意識、学ぶ姿勢が変わり、大きく成長した。これまで私が一生懸命勉強してきたモチベーションは全て自分のためであった。単に医学が面白かったり、テストでいい点を取りたかったり、そんなものだった。しかし、解剖実習を経て、ご献体いただいた故人とそこご遺族の方々に思いを馳せ、医学生である自分には医療の発展へ貢献する責任があり、医学に真摯に向き合うと前向きな気持ちになった。

最後に、解剖実習を支えて下さった全ての方々に心より感謝申し上げます。精進します。

森下 美海

解剖実習が始まる日、私は自分の死生観がガラリと変わってしまうのではないかと強い恐怖感を感じていた。これまで私は、何度か人と動物の死に向き合ったことがある。特に、長年ともに過ごした猫が冷たく横たわっていた日の朝の記憶は今でも鮮明に残っている。その時私は、家族として深い悲しみを抱き、その死は言葉にならないほどに私の中に重く刻み込まれた。しかし、今回の解剖実習で私たちが向き合う「先生」とは言葉を交わしたこともなければ、その人生の背景を知っているわけでもない。そのことに私は戸惑い、そして恐れを感じていた。これは、将来医者として避けられない「死」と向き合う最初の経験であると同時に、その「死」が自分の中で当たり前になることへの恐怖でもあった。初めて解剖実習室に足を踏み入れた時、白い布に包まれ、菊の花が添えられたご遺体を目にして、私は悲しみや恐怖、緊張、そして解剖実習室に漂う重く冷たい空気を感じた。しかし、毎日の実習を重



令和六年度慰霊式（学生の献花）

ねるごとにその感情は徐々に薄れていき、私はその変化に葛藤し、罪悪感を抱くようになった。

その苦しさを埋め合わせるように、私は実習の予習と復習に打ち込んだ。人体の精巧で合理的な機能や構造に触れれば触れるほど、その奥深さに気づき、より理解を深めたいという思いが強くなった。しかし、知識を追い求め

るほどに、ご献体くださった方が一人の人間であったことやご家族の尊い思いから自分が遠ざかっていくような感覚に苦しさは増すばかりであった。そんな時、ご献体登録の窓口をされている技術職員の方のお話を伺う機会があった。

「私の口から、ご献体登録をいただく方にその理由をお伺いすることはありませんが、その経緯をお話しして下さる方がとても多いんです」

その言葉を聞いたとき、私は初めて、ご献体いただいた故人は人体の構造への理解を深めるための先生であるだけでなく、私が抱えていた葛藤や苦しさそのものと向き合うための「先生」でもあったのだと気づいた。

この実習を通して、私は「死」をただ恐れるのではなく、それを通して学ぶ姿勢の大切さ、そしてその背景にある一人ひとりの人生の重みを深く感じようになりました。これから医師として命と向き合う道を進んでいく中で、この経験は私の支えとなり、決して忘れることはないと思います。

最後に、尊いお身体を私たちの学び

のためにお預けくださった故人とご家族の皆様にも、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

横山 乃綾

解剖実習では、解剖学の知識だけでなく本当にたくさんのことを学んだ。アトラスでは理解しづらい人体の構造の立体感、アトラスや実習の手引きと目の前のご遺体は別物だということ、仲間と議論を重ね協力して学びを深めていくことの楽しさと難しさ、命の尊さなどここには書ききれないほどである。六週間という時間で学び、考えたことは医師になるために必要不可欠であると感じている。

解剖実習はネル布を取り、ご遺体と対面した後、皮剥ぎからスタートした。皮膚を剥ぐなんて痛そうだと思つて初めは手が止まりがちであったが、下層に見えてきた脂肪や筋肉の層を目の当たりにすると、自分自身の目で初めて見た人体の内部構造に感動を覚えた。そこからは自分の手で解剖を進め

て新しい世界を見ることが面白く、あっという間に時間が過ぎていった。本とご遺体を何度往復しても同定ができなかったり、あるはずなのに見つけれなかったりして何度も立ち止まった。中間試問を経て実習が終わりに近づいてつれて、アトラスや実習の手引きとご遺体は別物であり、解剖実習ではご遺体から学ぶことが重要であると痛感した。これまで教科書に従った勉強ばかりをしてきた私にとって、この思考の転換は衝撃的であった。しかし、臨床の場において医師は論文などの書物を相手にするのではなく目の前の患者と向き合わなければならぬので、解剖実習で身に付けたこの発想は将来に非常に役立つと思う。

解剖実習の期間は毎日数時間の実習と予習・復習に追われ、体力的にも精神的にも決して楽ではなかった。ご遺体と長い時間を過ごしているうちに、生前はどんな生活をしていただろうか、どうして献体することになったのだろうかなどと様々な疑問が脳内を駆け巡った。お看取りをすることも多い医師の仕事に対する不安が芽生えたり、身近

な人や自分の死を想像して暗い気持ちになったりすることもあった。しかし、納棺の際にお花を添えて実習最後の黙祷をした時には実習前よりもはるかに気持ちが強くなり、死に向き合う覚悟と責任感が生まれた。「学ぶ」ということから逃げ出したくなることもたくさんあったが、それでも最後まで頑張り続けることができたのは向上心を持ち続け、何度でも励まし合った仲間が存在のおかげだ。最終試問を終えて喜び合った時の気持ちは決して忘れることがないだろう。解剖実習を共に乗り越えたことにより、また一段と絆が深まったように感じる。

たくさんのことを教えてくださった私たちの「先生」であるご献体いただいた故人に心から感謝します。また、故人のご遺志を尊重しご遺体の帰りを待ってくださったご家族、支えあった仲間、ティーチングアシスタントの先輩方、大変熱心にご指導くださった先生方にも感謝申し上げます。ご献体いただいた故人のご期待に応えられるような立派な医師になれるようこれからも精進してまいります。



筑波大学白菊会 規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。

(目的)

第二条 本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、 会員の親睦
- 2、 献体運動の推進
- 3、 会報の発行
- 4、 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第四条 本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。但し、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

- 1、 会長1名、理事長1名、理事若干名、幹事若干名
- 2、 会長は、筑波大学医学群長が務める。
- 3、 理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
- 4、 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- 5、 理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
- 6、 幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。

(任期)

第六条 役員の前任期は2年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は1年とする。但し、再任を妨げない。

(会議)

第八条 総会は会員を召集することなく、事業報告は白菊会ホームページに掲載とする。但し、会長は、重要案件があるときに会員を召集することができる。

(会計年度)

第九条 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

(経費)

第十条 本会の経費は、寄付その他の収入をもってこれに充てる。

(補則)

第十一条 この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。

(感謝状)

第十二条 献体された遺族に対し、会長(医学群長)より感謝状を交付する。

付則

この規約は、昭和58年4月1日から施行する。

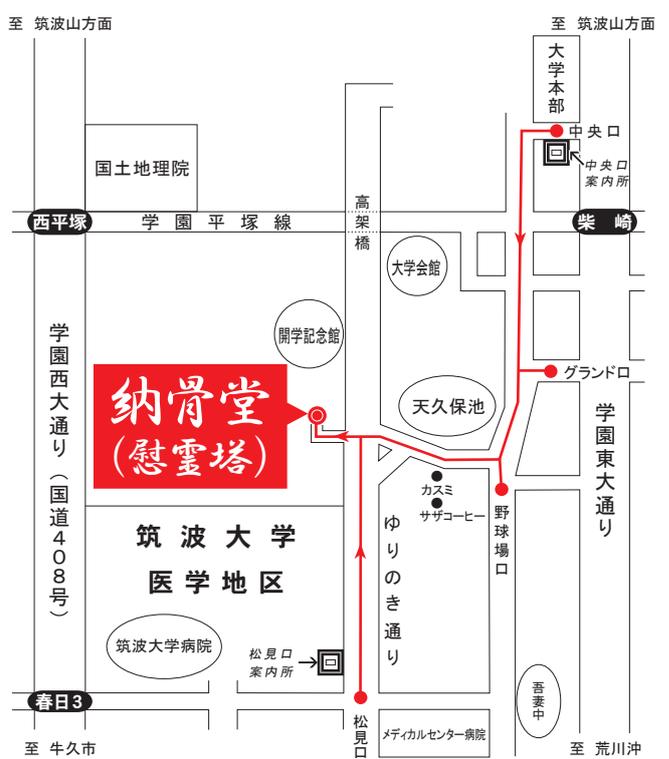
この改正規約は、平成24年4月1日から施行する。

この改正規約は、令和6年4月1日から施行する。

筑波大学白菊会共同墓地案内図



筑波大学白菊会納骨堂案内図



(交通ご案内)

車利用の場合(常磐自動車道)

- 土浦北I.Cから15分
- 桜土浦I.Cから23分

高速バス(つくば号)利用の場合

- 東京駅八重洲南口(②のりば)よりJRバスまたは関東鉄道バス「筑波大学行き」乗車～「つくばセンター」下車(約70分)→つくば北部シャトルに乗り継ぎ

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口(③のりば) 関東鉄道バス「つくばセンター行」乗車～「つくばセンター」下車(30分)→つくばセンターより下記のつくば北部シャトルに乗り継ぎ
- つくばエクスプレス(TX)つくば駅→隣接するつくばセンター(③のりば) つくば北部シャトル「筑波山口行」乗車～「大穂窓口センター」下車(約25分)

(所在地) 〒300-3253 茨城県つくば市大曾根根本333
(お問い合わせ) 029(864)6606

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

(交通ご案内)

車利用の場合(常磐自動車道)

- 土浦北I.Cから20分
- 桜土浦I.Cから20分

高速バス(つくば号)利用の場合

- 東京駅八重洲南口(②のりば)よりJRバスまたは関東鉄道バス「筑波大学方面」乗車～「筑波大学病院入口」下車(約75分)→慰霊塔まで徒歩(約10分)

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口(③のりば) 関東鉄道バス「つくばセンター行」乗車～「つくばセンター」下車(30分)→つくばセンターより下記の「筑波大学循環バス(右回り)」に乗り継ぎ
- つくばエクスプレス(TX)つくば駅→隣接するつくばセンター(⑥のりば) 関東鉄道バス「筑波大学循環バス(右回り)」乗車～「平砂学生宿舎前」下車(約15分)

お願い

ご住所を変更された場合は、白菊会事務局(電話〇二九一八五三一三三三〇)へお知らせ下さい。住所がわからずご連絡がとれないケースが増えております。

なお、会員がお亡くなりになり、ご事情により献体を取りやめる場合にも、ご遺族様よりご連絡をお願いいたします。



会員が亡くなられた際、

ご遺族の方々にしていただくこと

一、ご遺体を大学へ引渡す日時の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

(1) お通夜をせずに直ちに引渡す

(2) お通夜をしてから引渡す

(3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたら献体事務室の担当者(電話〇二九一八五三一三三三〇)と、ご遺体引渡しの日時と場所を打合わせて下さい。休日・夜間のお引渡しは大鵬社(電話〇二九一八二一一八三三三)に直接連絡下さい。

ご遺体の搬送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにまいります。(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参しますが、この点も打合わせて下さい。

(注) 大学へのご遺体引渡しが二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1) 医師の発行する死亡診断書を役所へ届出する前に、そのコピーを大学保管用にお取り下さい。お引渡しの際にお預かりします。

(2) 「埋火葬許可証」をお取り下さい。「死亡届」に死亡診断書をそえて、市区町村の役所へ提出すると交付されます。その際、火葬場所につきましては、県内の方は最寄りの火葬場、県外の方は「土浦市営斎場」とご記入願います。火葬年月日は献体のため未定とお伝え下さい。

(3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については、大学から書式を持参します。

なお、代表の方のご署名・捺印をいただく必要があるため、認印をご用意願います。